



週)報

2013~2014年度))) R I会長)ロン)D・バートン)
『ロータリーを实践して)みんなに豊かな人生を』
))))))))))第 2570 地区ガバナー)中)井)眞)一)郎)

国際ロータリー
第 2570 地区

狭山中央ロータリークラブ

〔例会場〕狭山東武サロン〒350-1305) 狭山市入間川 3-6-14)TEL)04-2954-2511
〔事務所〕〒350-1305)狭山市入間川 1 -24-48)TEL)04-2952-2277)FAX)04-2952-2366
<http://www1.s-cat.ne.jp/schuohrc/E> - mail:schuohrc@p1.s-cat.ne.jp
会長)栗原憲司) 会長エレクト)稲見)淳))副会長)高田虎光) 幹事)宮野ふさ子

〔第 3 グループ内の例会日〕 狭山(金)、新狭山(月)、入間(木)、入間南(火)、飯能(水)、日高(火)、狭山中央(火)
所沢(火)、新所沢(月)、所沢西(水)、所沢東(木)、所沢中央(月)

第 982 回(2 月 18 日)例会の記録

点 鐘 栗原憲司会長
合 唱 我らの生業
第 2 副 S A A 田中(八)君、若松君
卓話講師 童絵作家 池原昭治様

出席報告

会員数	出席者数	出席率	前回修正
35 名	26 名	72.73%	90.33%

会長の時間

栗原(憲)会長

今日は、経済新聞に載っておりまして、売茶翁と言われた、黄檗宗の僧についてご紹介させていただきます。

40 数年も前のことだ。仏教書を専門に取り扱う書店で一冊の本に出合った。「売茶翁」という題の漢詩の本で、私の目をくぎづけにしたのは、その表紙に描かれた肖像画だった。鋭く人を射すような眼光、伸びた髭。興味深い顔。近年人気が高い江戸中期の絵師伊藤若冲が一人の禅僧を描いたものである。

禅文化を専門に研究

売茶翁(1675~1763)は黄檗宗の僧で、都の名所で、あるいは自分の店で茶を煎じて客に売り、禅の教えを説いた人物だ。この不思議な禅僧に心ひかれた私はその生涯と思想を調べ、最近、彼の漢詩の英訳と伝記を執筆し、米国で刊行した。日本文化に関心を寄せる米国人に興味を持って受け入れられたようだ。

私は 1967 年から日本の大学で教鞭を執った日本文化研究者である。禅文化が専門だ。

日本の文化に興味を持つようになったきっかけは、学生時代に英国の日本文化研究者 R・H・ブライス先生の「禅と英文学」を読んだことだ。この人に会いたいと日本に来たが、残念ながら、前の年先生は他界された。だがこれもご縁と、先生の師である鈴木大拙先生の著書の英訳などをしな



がら、日本で研究に取り組むことになった。

盤珪や道元、白隠らの翻訳の仕事をしなが、時々売茶翁の漢詩に戻って、少しずつ仕事を進めた。当時、売茶翁に関する研究は、34 年に福山朝丸が漢詩、書簡、年譜をまとめた「売茶翁」という二冊本が出ていたのと、戦後に売茶翁の研究者、谷村為海が発表した年譜数編があった。伝記はまだなかったので、自分が書こうと考えた。そのため、最も重要な資料となる書簡を丹念に探し始めた。

美術館や個人所蔵のものもあった。古書店や骨董屋の目録で出物を待ち、それとおぼしきものを見つけたら、実物が写真で書を解読する作業が何十年も続いた。特に新たにみつかった 70、80 代に書かれた書簡から、その思想や生活ぶりが浮かび上がってきた。

「茶売りしながら修行」

売茶翁、幼名菊泉は肥前鍋島藩の城下町の蓮池支藩の家に生まれた。12 歳で化霖和尚のもとで度し、月海という僧名をうける。初めて京へ上がったのが 1687 年、化霖に伴われて黄檗山に登った時だった。

さらに諸国を行脚し修行を積み、肥前の龍津寺に戻って 15 年間寺務に携わった。師の死後数年して 50 歳で寺を去り、関西を目指した。還暦を迎えると京東山の鴨川を望む「通仙亭」の仮住まいで、茶を売る生活を始めた。僧職にありながら自活するのは戒律に反するにも関わらずである。

「対客言志」一編に、売茶翁が当時の僧侶たちを批判したくだりがある。「僧の中には貧りの心を持ち、施しの多い信者にこびへつらったり、布施を求めてはかりごとをしたりする者もいる、それよりは茶売りをしながら修行をする方がよい」と喝破したのだ。

宗教界の退廃を鋭く批判し、都の市街やその名所で煎茶を作り教えを説いた売茶翁の生き方は、人々の共感を呼んだ。若冲や池大雅のような当代屈指の絵師たちがこぞってその肖像を描いたのも、それを欲しがる人が多かったからだ。地方の貴人

や文人らと密に文通していたこともわかってきた。売茶翁は当時の京都の中心的文化人として最近注目されている。

伝記「売茶翁 18世紀の京都における翁の生活と禅詩」を2010年に刊行した。今や小さい町にも禅センターがあり、禅への関心が高い米国では、白隠や道元は知られているが、売茶翁の名前を知る人はほとんどいない。日本文化に関心を持つ人々たちにとって、芭蕉や良寛のような新しい禅詩人が現れたという標言もあった。

面白いことに、白隠や道元よりも、売茶翁の禅の方が米国社会にはなじむようだと言評された。米国社会では布施を得て修行する日本の禅寺のやり方はできない。日本にはない工夫が必要となり、普通の生活をしながら修行する在家禅の形になっている。レストランやパン屋を経営する禅センターもある。売茶翁は米国人たちがとりいれている在家禅のモデルとして捉えられたのである。

日本語版も出したい

あまつさえ近年は西海岸で煎茶のブームがあり、カフェもできているという。そんなこともあって、売茶翁は現代の西欧世界に生きる禅者や知識人の間で時ならぬ注目を集めるようになってきている。私にとっては大変喜ばしいことである。

長い未発表のものを含む50通ほどの書簡を中心に、伝記の日本語版もまとめた。現在出版社を捜しているところである。ぜひ日本の読者にも売茶翁のことを知ってほしいと思う。

幹事報告

宮野幹事

1. 2014~15年度PETS開催について
2. 2014~15年度地区チーム研修セミナー開催について
3. 次期RI会長メッセージについて
4. ガバナー月信(2月号)について
5. RI高校生向け留学説明会開催について
6. R財団、クラブ参加資格認定：覚書(MOU)取り交わしについて
7. ASエレファン狭山後援会、理事会・定期総会・壮行会開催について
8. 受贈会報 飯能RC 入間南RC
9. 回覧物 ハイライトよねやま167号

委員会報告

R情報・雑誌))))))片山委員長)

【表紙】

横書表紙の雪だるまの写真は、石川県の「白峰雪だるままつり」の光景だそうです。また、縦書き表紙の写真は島根県の「若武者」だそうです。縦書 p.33 に詳しいことが書かれていますので、皆さん読んでみて下さい。

【横書】

23頁~27頁に、「人頭分担金について知るための7つのこと」が質問形式で、それに答えるような形で書かれています。皆さん参考のために是非読んで頂きたいと思います。

【縦書】

14頁の下の方に「奉仕の理想を求めて」という、本庄ロータリークラブの方が投稿した記事が載っております。以前、当クラブもネパールに小学校を作りましたが、本庄ロータリークラブもネパールに小学校を建てたようで、そのことが書かれています。皆さん目を通して下さい。

18頁には、「より良い睡眠のための基礎知識」が書いてあります。皆さんに熟読して頂ければ有り難いと思います。

「外来卓話」・・・・・・・・

《講師紹介》

柴田 譲会員

今日は私と一緒に、「若葉台」という所に在住されております、池原昭治さんを紹介させていただきます。私も20年近く住んでおりますが、彼は42~43年住まわれております。

池原さんは、1939年に香川県・高松で生まれ、1963年に東映動画に入社されております。1982年に、テレビ「まんが日本昔ばなし」の動画をご担当をされ、そして最近では2000年に、郷土の高松市に「池原昭治動画館」が設立されたそうです。2004年には川越市「小江戸川越大使」に任命され、2005年に香川県琴平町で「池原昭治絵画展・わらべのうた」を開催したと伺っております。最近では狭山市の博物館でも先生の絵が展示されたと聞いております。よろしくお願い致します。

『狭山市に関係した伝説について』

童絵作家 池原昭治様



本日はお招き頂きまして、大変恐縮しております。私の仕事は絵を描くことと、その地方にまつわる昔話、民話、伝説のようなものを色々と採集ことですので、こうした所で話をすることは、苦手です。しかし私の集めたお話は日本の財産ですので、調べたものを皆さんに報告する義務がある

と思っており、そのためお引き受けするのですが、この日が近づくとつれ、凄く緊張をしております。

私はソフトボール等外で運動することは、下手なのですが、非常に好きです。負けて元々という気持ちで向かっていくので、投げ飛ばされても何をして仕方がないと思っております。しかしこうした所で開き直って話すとなると、失敗したらどうしよう、つまらないと思われたらどうしようと自分で勝手に思い込んでしまい、すると前に進めなくなってしまいます。しかし、ここまで来てしまえば仕方がないので、今日は狭山市に関係した伝説を、私が調べた範囲でお伝えさせて頂きたいと思えます。これが参考になるかはわかりませんが、自分たちが住んでいる場所にはこうした場所があるということ、何かの記憶に留めておいて頂き、それがどこかで何かのお役に立てば、幸いですと思っております。

狭山市は鎌倉街道が、市内の中央を貫いております。



入間川、笹井、水富、柏原、奥富、入曽、堀兼、6つの地区に分かれておりますが、この中で鎌倉街道は、入間川の所を通り、入曽を通過して所沢に抜けております。色々な説がありますが、奥州道というところは、智光山あたりの横を通過して、日高に抜けております。

鎌倉街道は、入間川の八幡神社と深いかわりがございます。昔、新田義貞が鎌倉を攻めたという話がございますが、旗揚げをしたのが、現在の群馬



(入間川・八幡神社)

県の新田という所だそうで、今も新田神社がございます。そこで鎌倉の北条を打とうとしたときには、わずか500騎足らずの群だったそうです。しかし利根川を渡り、荒川辺りまで来ると、義貞を応援する兵がぞくぞくと集まり、入間川に来た時には、1~2万騎と、随分膨れ上がっていたそうで、入間川を挟んで、凄く大きな陣を張ったそうです。ここから伝説が始まりますが、新田義貞がこれから鎌倉を攻めようとした時に、この八幡神社で戦勝

祈願を致します。伝説の面白さとは、その証拠たるものが残っていることです。

昔は、関東の騎馬武者ということで、馬が有名だったそうです。義貞の軍が大きな陣を張り、笹井の観音堂、地元では年末になると火を焚いて、暖をとる行事があるそうです。梅宮神社もそうですが、例えば2月11日の梅宮神社・甘酒祭りでは、一晩お籠りをした時に、どんどんと火を燃すそうです。これが大変評判なことで、「奥富おごり」と呼ばれ、火がごちそうになるそうです。昔は寒い時に、外で火を燃すことが一番のごちそうだと言われていたそうで、この辺りでも夜火を燃すことがあり、地元の人たちも、なぜ夜中に火を熾すのだと、不思議がっていたそうです。

この辺りでは子供たちのわらべ歌として、「おおさむ、かんなんどう(観音堂)かんなんどうで火がもえる...」と、その後は場所によって少しずつ変わりますが、火の事に対して不思議がり、そして最後には火にあたろうといった感じにまとまるものがございます。また、「山から小僧が吹いてきた」というわらべ歌とも混同したのも残っております。

昔陣を張った時に、火を燃し、自分の陣張りを誇示するようなことがあったそうです。これは伝説なので、正体が本当か分かりませんが、この辺りでは「きつねの嫁入り」を「オトウカの嫁入り」と言っておりますが、これも川原で火が一つ燃えると、この火がどんどんと広がっていき、それがゆらゆらとゆれながら、行進するというので、どうもかがり火を持った兵士が、あちこちに見張りをするようなことにもひっかかり、それが延々と伝説として繋がり、「オトウカの嫁入り」ということになったのではないかと話も聞きました。

義貞がここで戦勝祈願をしたとき、大きな1本の松の木があったそうで、義貞は乗っていた馬の手綱を、この松に繫いだという伝説があります。

ここには、「駒つなぎの松」という伝説が今も延々と伝わっておりまして、本殿の裏の立派な彫刻の御社のすぐ横に立っていたそうです。今はこれが無くなり、私が見た時には根だけ少し残



(駒繫ぎの松)

っておりましたが、これも今は定かではなく、すぐその横に、2代目もしくは3代目の松が植えられているそうです。これは鎌倉街道を調べる方にとっては重要な場所ということで、この八幡神社は有名だそうです。

簡単に八幡神社と申しましたが、ここは正式には「入間川八幡神社」です。この辺りで気を付けなければならないのは、「入間川」という地名をはずして色々と言っていると、誤解されるということで、そして値打的にも、入間川という地名が入った方が、より全国的な話や物になるのではない

かだと思います。その証拠として一番有名なものは「七夕まつり」です。

私はこのようなことを調べていた関係で「七夕まつり」のポスター等を依頼されたことがございますが、少し誤解しており「狭山の七夕まつり」と描いたことがございます。すると入間川の商店の方が、これは違う、入間川

を入れなければ駄目だとお話されました。やはり「入間川の七夕まつり」ということが重要だそうです。確かに入間川という地名は、全国でもあまり聞かない名前です。有名なものには、「入間川」という



狂言がございませう。これも毎年狭山では、有名な狂言師が来てやっておりますが、さらに狭山市を流れている「入間川」がそうではないかと言われております。

これも色々な伝説で広がっていきますが、入間川は戦場だったらしく、新田義貞以降も色々な戦いがあったそうです。この入間川を渡る時、浅瀬を上手く渡り、その渡った場所は「八丁の渡し」という地名が残っております。この地名は現在も残っておりますが、絶対にここだという決め手がまだないらしく、言い伝えとして、あちこちに伝わっております。狭山市でも国道16号線沿いに「清水八幡神社」がありますが、その辺りや、もっと

下って奥富の「九頭竜様」という、水が荒れた時に沈める石仏を祀っている辺り、そしてその向かいの柏原の城山砦辺りがそうではないかと聞いております。ところが入間川をずっと下って川越の方に寄りますと、川越の増形辺りに、やはり「八丁の渡し」のよ



うな地名が残って (八丁の渡し)

おります。ひょっとするとこちらの方が歴史的には近いのではないかとというような、色々想像できる場所が残っております。入間川の狂言で「さかさことば」がありますが、この1カ所だけにまとめようとするのではなく、もっと広い見地で見た方がいいのではないかと思います。

そうしたことで色々と言われているのが、新田義貞が八幡神社で戦勝祈願をし、今の所沢の近く、久米川の方に進んでいきますが、その途中の小手指ヶ原で大激突をしたという話です。この時も想像としては、1~2万騎と言われていた兵が、同等の規模の兵とぶつかり合えば、この小手指の小さな場所ではなく、広大な所で戦があったのではないかと考えられます。小手指の白旗塚の周辺だけでなく、伝説が残っている場合でも、想像的にはあちこちに散らばっております。鎌倉街道、この辺りでは「かみつみち」と言われておりますが、この「かみつみち」の周辺にしても、幅数十キロ

圏内で戦になったのだと思います。ここからもう一つの伝説として、北入曾に流れてきますが、入間市の「不老川」^{としとらすがわ}があります。これを渡って、小手指に向かったというものです。

新田義貞は源氏方ですので白い旗を掲げて戦をしており、小手指の塚は白旗塚と言われております。ここ



(白旗塚)

に来るまでに、新田義貞の伝説が残っている場所として、川をすぐ渡った辺り、藤沢辺りに「熊野神社」がありません。比叡神社の眷属は「猿」、春日神社の眷属は「鹿」、春日神社とは奈良県が大本ですが、川越にも春日神社がありまして、やはり「鹿」にまつわる伝説がございませう。そして「熊野神社」の眷属は「鳥」です。この「鳥」が何故か3本足なのです。戦う神様の威厳を示している姿だそうですが、この熊野神社で戦勝祈願をして、新田義貞は白旗塚へ行きますが、熊野神社の近くには「新田橋」という橋がございませう。この橋に掛かる前から不老川に来るところが坂になっておりますが、この坂あたりも「新田坂」という地名が残っております。新田義貞は正規の「かみつみち」をずっと行ったのではなく、こちらからも攻めたのではないかという話もあります。

ずっと行きますと、所沢の「新光寺」や所沢で鎌倉街道と呼ばれている場所に繋がっていきます。そして八国山の方に続き、この八国山には將軍塚という塚があり、ここでは昔、大きな石碑が出た場所があるそうです。その年号を合わせると、ここで



大きな戦があった (八国山峠に向かう鎌倉街道上道) とことを示すことが出来るそうです。八国山やすぐ山を下った所に「徳蔵寺」(通称：ちらかし寺)と言うお寺がありますが、そこはその周辺で拾われた板碑等を沢山集めているそうで、こちらに行くとい国宝級の板碑を見ることができます。

このように、鎌倉街道沿いには色々な伝説があります。私が今話しているのは伝説ですので、史実にどれだけ基づいているかということは、まだ疑問ですが、これが鎌倉街道にまつわる大まかな伝説です。

八国山の上に將軍塚がありますが、その近くに「悲田処」があったそうです。ここでは鎌倉街道を通る人が、病気等で困ったときに助けるという役割を果たしていたそうです。そして質問にでた「勢揃橋」という橋がございませうが、これは新田軍など、色々な武将がここに勢ぞろいし、ここからどこに攻める等を話した、そういうたいわれのある場所だそうです。このすぐ近くに「長久寺」とい

